



Title	＜書評＞「育児の百科」の著者の身を切る思い：松田道雄「安楽に死にたい」（岩波書店）
Author(s)	鷺田，清一
Citation	臨床哲学ニューズレター．1998，2，p. 118-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81755
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『育児の百科』の著者の身を切る思い

——松田道雄『安楽に死にたい』（岩波書店）

驚田清一

「安楽」ということの意味の空洞化、あるいは「安楽」であることそのことの現代におけるむずかしさを、しずかに、深く訴えるふたりの思想家がいる。80年代、国をあげて高度消費へとなだれうっていたなかでそこに「「安楽」への全体主義」を苦々しく読みとった藤田省三と、この春、齢88にして『安楽に死にたい』を世に問うた松田道雄である。

藤田は、一昨年に刊行され、大きな話題になった『全体主義の時代経験』のその巻頭論文「「安楽」への全体主義」のなかで、ひとびとは「少しでも不愉快な感情を起こさせたり苦痛の感覚を与えたりするもの」はみな、その原因ごと一掃してしまいたいという、「根こぎ」の衝迫につきうごかされているという。安楽が不快のない状態へと一面化されてしまい、そういう「抑制のかけらも無い」うすっぺらな「安楽」を追いかける精神状態のなかで、「生体内で不快と共存している快楽や安らぎ」が逆に視野から失せる。そうして「「安らぎを失った安楽」という前古未曾有の逆説」が出現するというのだ。藤田はこうした社会のニヒリズムを「「安楽」への全体主義」とよんだ。

松田道雄の問いは、ある意味でさらに身を切るようなものだ。松田は、ことわるまでもなく、あの『育児の百科』の著者である。子どもの突然の変調に心細くなっておろおろするばかり、そんなときすがりような思いでこの育児書の記述を開くと、そこにいつも「心配しなくていい」「心配せずに、ふつうに遊ばせておけばいい」という文章が最後に添えてあって、ところが芯からほぐされたという思いは、この国の多くの若い親たちが共有してきたものだ。

松田は、医師として、つねに病人のがわから治療を考えるという姿勢をつらぬいてきたひとだが、その松田がここでは、死にゆく者のがわから治療と介護を考える。というより、みずからもそのひとりとして、やむにやまれず発言する。

問いは一つ。ひとはなぜ安楽に死ねなくなったのか、なぜ息をひきとる前に病院でいろいろ苦しまなければならないのか、こういう医療の現状を打開するためにはどうしたらいいかということだ。

家族に囲まれ、見なれた調度をながめ、過ぎし日のアルバムをめくり、家族に後のことをたのんで死んでゆく、そういう最期というのは、いまではほとんど不可能になっている。医療の制度によって、である。

「医者は死に近い人間を Terminally ill という。ill があるかぎり医者は治療をするのは当然と思っている。高齢者にとっては、ill があっても Terminal Life を生きたい」というのが、ほんとうのところだろう。医者使命は苦しみをなくすることだという考えと、医者使命は生命をのばすことだという考えとがある。いまの医療制度は、後者の考えに立っているので、「高齢者にたいする病院治療の空しさ」への反省から生まれたホスピスや特養でさえ、そこで死を迎えられる老人は三割しかいないということになる。

これにたいして、「もう Cure(医者のやる治療)はたくさんだ、Care(親しい人の心のこもった世話)だけにしてほしい」という高齢者の痛切な思いがある。歳をいけば、「痛みさえなかったら生きているだけで幸福の感はある」。だから、「検査で異常がみつかったら治療する医師主導の考えを、特養では引っこめて、疼痛の緩和にかぎるべきだ」と、松田はいう。そしてケアを最優先した高齢者介護と、「患者主導の補助自殺」を認める安楽死の法制化を求めるのである。

往診はせず、三分診療がふつうになった医療の現場へのきびしい批判である。ここにのぞくのは、かつて町中で診療にたずさわりながら、京都大学人文科学研究所の共同研究員となり、のちに『ロシアの革命』という歴史書を執筆した社会思想家、市民派思想家としての顔である。その顔はこんな発言のなかにものぞく。

「介護の担い手として家族というものはもう当てにならない。そういうものはいま存在しないのだということをもっとはっきりさせなければいけない……。だが家族の介護よりも他人の介護のほうがいいことがわかってくれば、江戸時代のからの「赤の他人」という人間像がかわってくるでしょう。それが民主社会の他人です。」

「人さまのためになることはできなくても、自分の楽しみをみつけて生きることができます。だがこれ以上耳が遠くなり、視力がおとろえ、味覚もにぶくなり、酒をのんでも二日酔が不快になったら、そこで決心することになるでしょう……」。死を感じて、「もう一食たりとも意に染まぬ晩飯は食わない」と決心し、千食分の献立を考えだした『あと千回の晩飯』の山田風太郎とともに、じぶんの生を最後まで手放すまいという、つよい生き方だと思う。

(「セーマ」Vol. 1-1 哲学書房)